

児童文化財に関する研究

その I 1978年度児童文化財研究文献の総合化と体系的分析

分担研究者 研究第 8 部 中山 茂

児童文化財に関する研究文献のうち、大学、研究所などの研究紀要にみられるものは、一般の目にふれることが少ないと思われるので、図書、雑誌等にみられるものを併せて、一覽にすることは便宜であろうと思う。しかし、児童文化財の研究といっても、広い範囲にわたり、さまざまな角度があるので、ここでは、児童文化財が子どもの生活とかかわりあうところに焦点をあてたものに限定することとした。それとても明確に線をひくことはできないが、心理や教育の専門領域として理論や技術の研究を意図するものとか、文学論、作家論、作品論といったようなものは敬遠し、専門的なものでは、児童文化一般の理解をたすけるものとしての歴史、現状概観などを内容とするものは含めることとした。

対象としたのは、1978年中に刊行された図書、雑誌、研究紀要で、研究紀要は、寄贈されたもののうち、児童文化に関係のある学科をもつ大学、短期大学のものを対象として選んだ。御好意を謝するとともに、前記のような考え方で割愛した文献があったことをお許し願いたい。

文献は、内容によって、一般、絵画、音楽・うた、劇、児童図書・児童文学、遊び、玩具、テレビの 8 項目にわけて紹介することとした。

1. 一般

自伝的児童文化史——菅忠道著（国土社、1978—3）

著者の生涯における児童文化とのかかわり合いを、少年時代から、旧中高大学時代、社会に出てからの記者時代、戦前、戦中までを語ったものである。編集者の渋谷清視氏が聞き手となって話を引き出しているのので、いろいろな興味深い問題が語られ、また、人どのかかわりあいなどもわかって面白い歴史となっている。

伝承文化の今日的意義——「子どもの文化」特集、1978

—6、（財団法人文教協会子どもの文化研究所）

伝承文化を子どもの文化の問題としてとらえるとき、子どもの生活や発達の危機という観点から伝承文化が評価されてきたにもかかわらず、子どもの生活状況を変革

しようという意識の強まらないまま、遊びの方法や技術の抽出や伝承という点だけが浮上ってくることに際していろいろな問題提起をしているもので、「伝承文化の今日的意義（寺内定夫）」「伝承文化をどう伝えるか（菅原道彦）」がある。

2. 絵画

幼児の絵画知覚と言語表現——品村幸子・井戸裕子・一ノ瀬和子・堀内康人（東京家政大学研究紀要第18集（1）人文・社会科学、1978—3）

幼児に絵を見せて、どのように感じたかを言語で表現させ、それをテープにとり、知覚と言語表現のかかわりをさぐるものとして、同じ絵本の 8 場面を 24 名の幼児に見せて話し合った結果をまとめたもので、発達段階にしたがって言語表現の様式が変化するすがたが確かめられた。

3. 音楽、うた

童謡、唱歌の世界——金田一春彦著（主婦の友社、1978—11）

昭和44年から52年までの間に、折々に発表したものをまとめて、体系的に書きととのえたもので、「唱歌—この日本的なもの」「童謡—世界に誇る文化財」ほか 3 篇にまとめ、唱歌、童謡の特性から、わらべうた童謡のことばや曲の美しさの秘密など、こまかに分析している。幼児はどのようにして音楽に近づくのだろうか——後藤田

純生・繁下和雄・園部三郎（園部三郎著「おとなはみな子どもの時を忘れてる」、音楽之友社、1978—3）

9つのテーマについて、それぞれの問題の専門家と対談した教育評論集で、その中の第 1 篇がこれである。著者が音楽評論家であるため、どの篇にも音楽教育の問題が首を出しているが、とくにこの篇では、幼児に対する情緒的な、からだを動かしてのしむような音楽が大切であることをのべている。

わらべうたにおける児童文化構造——角田巖（文教大学研究紀要第11集、1978—3）

わらべうたは遊びのうたとしてとらえられるが、この遊びは固定的なものでなく、児童の発達段階に応じた人間関係の構成の変化とともに発展する。①あやしうた一家族集団、②遊びうた(遊戯集団)、③歳事うた(地域集団)としてとらえられるが、基盤となる人間関係の健全化に焦点をあてて考えることが必要である。

4. 劇

児童の観劇反応に関する研究——星 美智子・湯川礼子
(日本総合愛育研究所紀要第13集, 1978—3)

1976年6月、9月に東京都の小学6年生を対象として、劇団四季の出演で行われた日生名作劇場「冒険者たち—ガジバとその仲間」において、児童の観察や感想文の分析、出演側の人たちとの面接などによって、総合的に児童の観劇反応を把握した研究である。

5. 児童図書, 児童文学

児童文学の戦後史——日本児童文学者協会編(東京書籍 1978—12)

社団法人日本児童文学者協会が創立30周年記念として編集出版したもので、第1編は、「戦後児童文学の動向と課題」という評論で、総論とジャンル別に各執筆者が自分の主張をのべ、第二編は1945~1976の年表、第三編は『日本児童文学』の総目次で、年表には関連する教育と文化の記録を含んでいる。

子どもの本と読書を考える——渋谷清視著(鳩の森書房 1978—6)

ここ数年のあいだに新聞、雑誌などに発表したものを中心に、「子どもの本の出版状況と問題点」「子どもの本の見かたと読書を考える」「子どもの本の研究・評価と選び方」の3編に体系化した。

絵本をみる眼——松居直(日本エディタースクール出版部, 1978—1)

5年前に出版された「絵本とは何か」に続く絵本研究の書で、とくにイラストレーションについて多くの頁をさいている。「子どもが喜ぶ絵本」の章では、作品を例に細かい分析を行なっている。

絵本の与え方——渡辺重男(日本エディタースクール出版部, 1978—11)

「絵本の発見」「絵本の与え方」「絵本のたのしみ」3のつの章と、5つのエッセイから成りたっている。第1章は、自分の子と絵本との出会いをこまかに描いて納得させる。よい絵本とは何かを、送り手、うけ手の角度からのべている。示唆にとむ。家庭生活における絵本について—「児童文化」の内容に

関する研究(4)——松原醇子(鳥取女子短期大学研究紀要第7号, 1978—11)

保育園児、幼稚園児の家庭では、母親はどのような見方で絵本を選択するか、どんな絵本が現実には選ばれているか、読み聞かせをどうしているか、自分の子を絵本好きと思うか、などについてアンケート調査したもので、家庭環境が絵本と子どものかかわりに影響することがはかり知られる。

児童図書館の現状と諸問題—その1—子どもの意識調査を中心として——高橋裕子(東京家政大学研究紀要第18集(1), 人文・社会科学, 1978—3)

東京・千葉・岩手の3地域の5つの児童図書館で、子どもの意識調査を行ない、その結果から、児童図書館の問題点を探ろうとした。子どもが図書館を知るきっかけは、幼少時は親兄弟、小学生では友だちにつれてこられたことが多い。図書館の地域社会への働きかけの必要なことを示している。

6. 遊 び

幼児集団における遊びの研究——田中薫(長崎県立女子短期大学研究紀要第26号, 1978—12)

昭和52年4月から53年3月までの1年間、諫早市、大村市内の保育所・幼稚園において、自由遊びの時間に幼児の遊びを観察・記録した結果の報告である。3歳児4歳児、5歳児別に、多い遊びの種類や場所、継続時間などを分析して、発達の傾向と結びつけて論じている。

7. 玩 具

おもちゃから玩具へ——和久洋三(玉川大学出版部, 1978—10)

おもちゃ、玩具、遊具などの言葉が、子どもの用品の呼称としてしっくりしないことから、これを玩具と呼ぶことにし、玩具には、具象的なものと抽象的なものにわけられることから、それらの特性を分析し、ひたむきに理論を追い求めながら、理想の玩具を創造していく心情を吐露している。

8. テレ ビ

子どもの生活とテレビ——「子どもの文化」特集, 1978—3, 財団法人文民教育協会子どもの文化研究所)

テレビが放映されて25年、種々の角度からその功罪が論じられてきているが、この特集では、子どもとテレビの関係は何が問題なのかという問題提起をする。とともに、子どもの生活時間の中でテレビはどうなっているかという実態調査の2つの角度からとりくんでいる。

「子どものテレビ視聴の問題性を衝く(小木美代子)」は、岩佐京子氏の「テレビに子守をさせないで」や、その後、多くの人々の議論の大筋を紹介し、子どもの発達を阻害せず、テレビを逆に子どもの発達に寄与させるために、子どもの発達との関連におけるテレビのプラス・マイナスの要因を究明するとともに、一方では放送の体制を調整し、また、家庭における子どもの生活の調整に努める必要があることをのべている。

また、「幼児の生活とテレビ(阿部明子)」は、阿部氏が行なった「子どものテレビ時間」の調査で、子どもの生活の中でテレビがどういう位置を占めているかを調査した結果を分析して、子どもにとって望ましい生活のリズムを作り、その中にテレビをみる時間をおくということ、親の生活態度の転換をはかることが必要であると

のべている。

〔終りに〕

この年度では、こどもの歌、児童図書、とくに絵本に関する文献が多かった。専門的なものとして敬遠した研究にも、この領域のものが多かった。多くの研究が、子どもの生活、子どもの発達とのかかわりあいにおいて児童文化財を考察しており、昨年の遊びとのかかわりあいにおける考察の多かったことからみると、さらに一步、ひろいところに展開されたという感慨をもたされ、心強く思った。なお、上記の各文献について、もうすこし詳しい紹介は、別に刊行される、朝日生命厚生事業団の研究報告のなかに含まれている。

この研究は、朝日生命厚生事業団の助成によるものである。朝日生命厚生事業団の代表者は、朝日生命厚生事業団の代表者である。

朝日生命厚生事業団の代表者は、朝日生命厚生事業団の代表者である。朝日生命厚生事業団の代表者は、朝日生命厚生事業団の代表者である。

朝日生命厚生事業団の代表者は、朝日生命厚生事業団の代表者である。朝日生命厚生事業団の代表者は、朝日生命厚生事業団の代表者である。

朝日生命厚生事業団の代表者は、朝日生命厚生事業団の代表者である。朝日生命厚生事業団の代表者は、朝日生命厚生事業団の代表者である。

(0.00)	0	(0.00)	0
(0.01)	1	(0.01)	1
(0.02)	2	(0.02)	2
(0.03)	3	(0.03)	3
(0.04)	4	(0.04)	4
(0.05)	5	(0.05)	5
(0.06)	6	(0.06)	6
(0.07)	7	(0.07)	7
(0.08)	8	(0.08)	8
(0.09)	9	(0.09)	9

朝日生命厚生事業団の代表者は、朝日生命厚生事業団の代表者である。

朝日生命厚生事業団の代表者は、朝日生命厚生事業団の代表者である。朝日生命厚生事業団の代表者は、朝日生命厚生事業団の代表者である。

朝日生命厚生事業団の代表者は、朝日生命厚生事業団の代表者である。朝日生命厚生事業団の代表者は、朝日生命厚生事業団の代表者である。

朝日生命厚生事業団の代表者は、朝日生命厚生事業団の代表者である。朝日生命厚生事業団の代表者は、朝日生命厚生事業団の代表者である。